

矢筈岬ダイビング …2
白谷雲水峡の樹木 …4

フィッシュウォッチング… 8
下田和子エッセイ …11

G T I …12
屋久島本の世界…13

屋久島ウゾウムゾウ …14
お知らせほか」 …16



たき火歴20年

取締役営業部長 市川 聡

まだ人生を振り返るような年ではないが、気がついてみると着々と年は巡っているものである。先日、安房川のカヌーツアーで、いつものようにたき火をしていたら、お客様から、「たき火歴何年ですか？」と質問を受けた。たき火歴など考えても見ない質問であったが、振り返って考えてみると18歳で北大に入り、クマ研で本格的にたき火を覚えてから、まもなく20年になろうとしている。

そう言えば、学生時代から使っている双眼鏡やシュラフ、リュック等もまもなく20年選手だ。いささかくたびれてきたのもうなずける。

北海道のたき火は、暖を取るための豪快なたき火であった。そのへんの枯れ枝を拾ってきて、ちまちまとやっていたら、先輩から馬鹿にされたものがある。鋸を使って、立ち枯れの太い木

を切り倒してくるところからたき火ははじまった。焚き点けはガンビ、つまり白樺や岳樺の樹皮である。油分が多く、黒い煤を出してよく燃えた。

そんなたき火三昧の学生生活であったが、たき火というのは暖かく、見ているだけで心が休まるものである。残雪の天塩の山や知床の海岸でたき火を囲んで語り合った時間が、今の人生を支えていると言っても過言ではないであろう。

ところが最近では、たき火もおちおちできないご時勢になってきたようである。神奈川県では、県条例でたき火が禁止されていて、自宅で落ち葉を燃やしてもいけないそうである。ここ屋久島でも、どこもかしこもキャンプ禁止だ、たき火禁止だと、なんだか遊びにくいギスギスした雰囲気が漂いはじめている。挙げ句の果ては、入山規制だ、

入島税だと、お上による自然利用への介入を許す声が大きくなり兼ねない心配である。

キャンプやたき火は悪いものだというレッテルがいつのまにか貼られてしまっているようだが、もし不都合があるとすれば、それはマナーが悪いのであって、キャンプやたき火が悪いわけではない。火を点け、火を守り、火を加減し、火を見て語り合う、太古から続いてきた営みは、多くの学びや心の拠り所として、今も不変の価値を持ち続けている。そうした自然の中で得られる不変の価値を守り育てることも、世界遺産として重要なことではないであろうか。

あんまり、うっさかこといわんで、たき火でも囲んで、焼酎でも飲まんね。

YNAC特選

コースガイド

⑦矢筈岬 管理棟下 [ダイビング]

YNAC通信No5で紹介した元浦海岸と同じ矢筈岬の東側面にあるが、矢筈岬の中ほどの位置するため外洋の要素が強い。元浦海岸とセットにして潜ってみるとその違いがでておもしろい。

【概況】

矢筈岬の東側面の中ほどに位置する。北西に吹かれ、元浦しかポイントがない場合のファンダイブに使うポイント。ハマサンゴのガマやミドリイシ、ナガレハナサンゴなどのサンゴ群落が発達している。また、水深20mまで落ちているので元浦海岸では見られない魚種が多い。ただし、駐車場から海岸までかなり急な坂道を降りなければならない。あまりタンクを担いで歩くことに慣れていない人にはお勧めできない。

①車駐場

矢筈キャンプ場のトイレと管理棟（現在閉鎖している）があり、横に駐車場がある。トイレと水道があるので便利。

浜への降り口は分かりにくい。いきなり急なので滑らない要注意。一段降りてしまうと後はそれほど急ではない。この道に夏はオカヤドカリを見つけることができる。天然記念物なので獲って帰らないように。

②浜

玉石の浜。ちょっとしたうねりならここまでは入ってこないでエントリーしやすい浜になっている。右手岩場はちょうどフィンやカメラを置いてエントリー準備をするのにいい岩場になっている。

③エントリーポイント

入ってすぐいくつか岩があり、それを抜けると玉石になっている。すぐ横の切れ込みを覗くとオヤビッチャやイチモチの仲間が群れている。

④玉石

夏から秋にかけてはキピナゴが入ってきて、それにハナイカ（アオリイカの子ども）やダツの仲間がついている。また、

玉石のすき間をネズツポの仲間（種は同定できていない）がちょろちょろはっている。このあたりなぜかコクテンフグが異様に多い。

⑤砂地

玉石・岩場のすき間に砂が堆積している。岩場と砂地の境目の影にオシャレカクレエビがベアである。また、砂地の上には巨大なバイカナマコ・イシナマコが横たわっている。そのナマコにつくウロコムシやナマコガザミなど探してみるとおもしろい。砂地の中に1m近いマダラエイが潜っていたこともある。

⑥ミツボシクロスズメの岩

砂地に目立つ大きな岩があり、下が空洞になっていて沢山の魚がついている。中でも体長10cmを超えるミツボシクロスズメがおり、頻りに雌を誘うダンスを踊っていたり、卵を守っていることがよくある。卵は非常に小さく肉眼では見えにくい。

⑦ハナビラクマノミの岩

⑥のミツボシクロスズメの岩よりさらに大きい岩がある。これも空洞がたくさんあり、多くの魚がついている。特に目につくのはキンギョハナダイ・ハナゴイが色鮮やかである。この岩の裏側にシライトイソギンチャクがついていて、これまでに二回ハナビラクマノミが確認されている。屋久島ではクマノミしか見ないが、なぜかここだけハナビラクマノミがつくのは不思議である。

⑧ガーデンイール

以前このあたりでガーデンイールを確認したことがあったが、ある台風の後姿を消していた。今年の夏、再度確認した。20~30匹のコロニーであるが撮影に成功した。根の先端南東方向の岩混じりの砂地にいる。屋久島でガーデンイールを確認したのはこの周辺だけである。

⑨外洋砂地

岩混じりの砂地であるが、さらに沖合に行くと砂地のみになる。砂漠のようなであるが、よく探すとウカムリやホウボウなど砂地の生き物に出えることがある。ただし、水深とエキジットポイントとの距離があるのでエアーの残圧に注意を。

⑩クロヘリイトヒキペラ

このあたりにはクロヘリイトヒキペラが群れていてよく雄が体色を虹色に輝かせながら求愛行動をとっているのを見かける。また、サンゴのすき間をソメワケヤッコやアカハラヤッコがちょろちょろと泳ぐ姿を見つけられる。

⑪ミドリイシ群落

ミドリイシの群落があり、スズメダイ類・チョウチョウウオ類が群れている。クサビイシ類も多い。ナガレハナサンゴの中のニセアカホシカクレエビやウミシダの中のウミシダドリエビなどカクレエビの仲間をいろいろ見つけることができる。

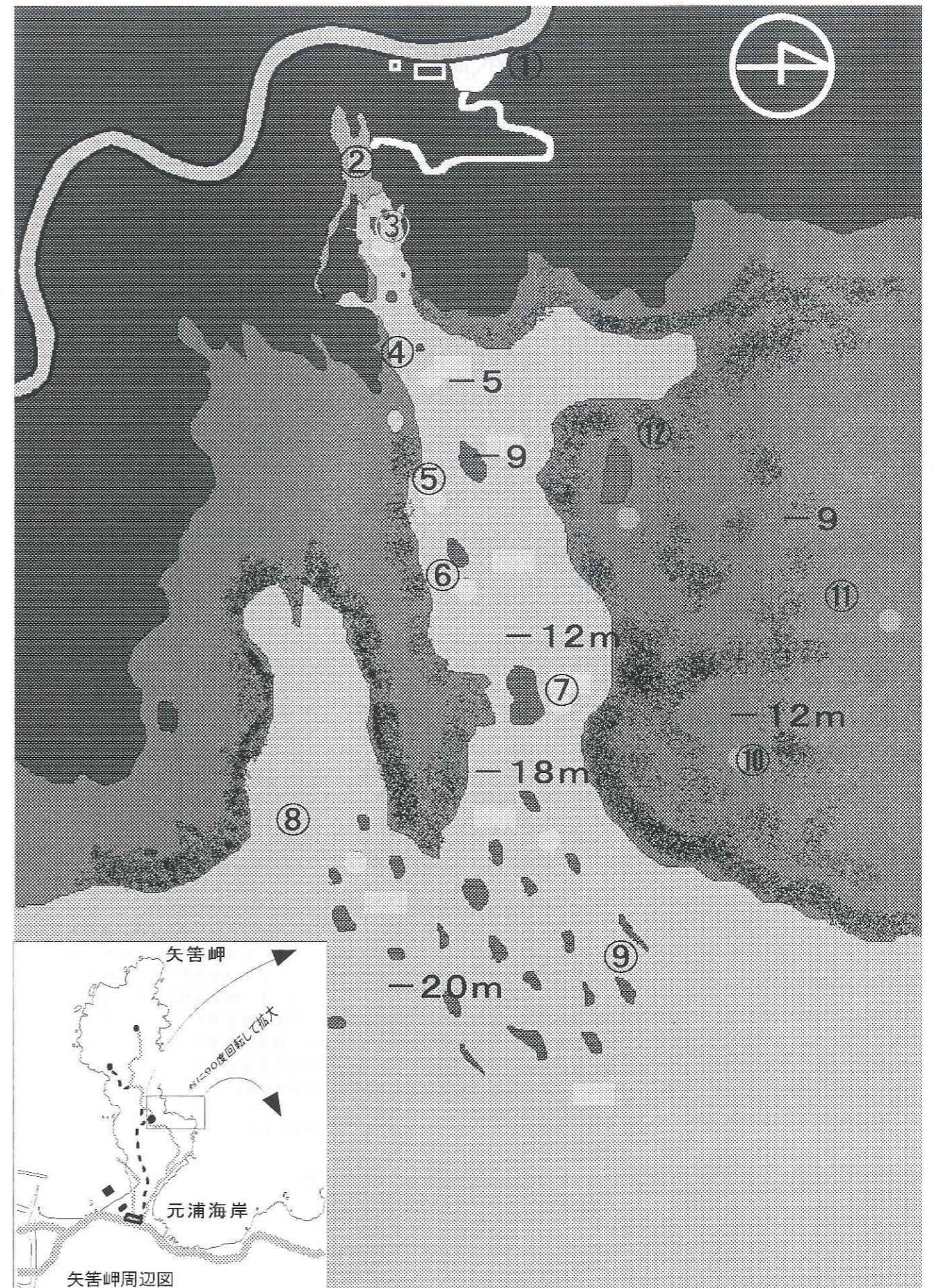
⑫ハタタテハゼ

帰りの最後の岩でこの岩の周りの岩場にはハタタテハゼのベアが何組も見られる。驚かさぬように遠目に見つけてそっと近づくとかなり近くまで接近できる。

モデルコース

- じっくりコース
①-②-③-④-⑤-⑥-⑦-⑩-⑪-⑫-③
ガーデンイールコース
①-②-③-④-⑤-⑥-⑧-⑨-⑦-③

北西の風の時、坂の上り下りがきついが是非トライしてみよう。もし、坂の上り下りが嫌な人はボートをチャーターすると楽でいい。おもしろい所が水深10m以深なのでスノーケリングには向かない。



矢筈岬周辺図

白谷雲水峡の樹木

小原比呂志

はじめに

有名になりすぎた縄文杉への反動もあってか、このところ白谷雲水峡への評価が高まっているようである。

しかし白谷では、これまでにシカ(YNAC通信4号)、蘇苔類(同5号)などの調査はあるものの、森林生態系についてのまとまった研究はなく、その全体像は明らかにされていない。

1998年秋、筆者はいくつかの特徴的なポイントを選び、白谷の森林構造を明らかにして行く試みを開始した。しかしあっという間につまずいた。ポイントごとに森の性格がばらばらで、全体に通じるモデル化がまったく出来なかったからである。

試みを通して受けた印象は、白谷は島津藩政時代から現代に至るまで、実に様々な時代にわたって伐採された跡地であり、パッチワーク状に様々な遷移段階が見られる、というものだった。つまり白谷の多様性には、人滅の活動が強く影響しており、これを解明するにはかなりの時間が必要になる。

そこで方針を改め、まず樹木のリストを作り、これに基づいてトピックス的に森の様々な顔をのぞいてゆくことにした。

調査方法

調査は1998年11月10日と12日に行った。基本的に遊歩道沿いを移動して観察した。そのさい双眼鏡を片手に歩道をぶらぶらす範囲でどの程度わかるか、という点に限定してみた。

この方法で、白谷雲水峡の標高600mから900mにかけての遊歩道沿いに出現する樹種をリスト化した。遷移初期に出現する種が多く見られる白谷林道の白谷広場付近～ひりゅう歩道分岐間と、立地が複雑で種の多様性が高いと思われる、白谷川沿い遊歩道の白谷広場～さつき吊橋間で集中的に調べ、さらに大ツガ歩道～楠川歩道～原生林歩道(一周コース)その他の遊歩道沿いに見ら

れた種をこれに加えた。楠川歩道の白谷林道交差点～三本杉間は、アカガシやウラジロガシの巨木が多く、立派な照葉樹林の見られるところだが、今回は調査しなかった。

結果と考察

白谷は、調査地域内で74種の樹木が現れた(表)。事前にチェックを繰り返した上でリストアップしており、主要種で漏れたものはあまり無いと思う。

スダジイ、マテバシイ、タブノキなど低山地の主要種は白谷林道標高600mを越えると急激に減少し、それより上ではウラジロガシ、アカガシ、ホソバタブ、イスノキなどのカシ林要素が優先してくる。屋久島の標高1200m以下を占める照葉樹林帯では、低山帯のシイ林と、中山帯のカシ林との境界が標高500m前後にあることがわかっており、今回の調査でも、白谷はカシ林にふくまれることが見てとれた。

屋久島は年間を通じて湿度が高く高度による気温低下のダメージが緩和されるので、垂直植生ゾーニングがきっぱりと分かれにくいという特徴がある。白谷でもヒメシャラ、リョウブ、ナナカマドなどブナ帯要素が多く、上位にあるブナ帯への移行帯としての性格も強い。ブナ帯の陽樹は、照葉樹林上部のギャップに下降する形で侵入することが知られている。同時にツガ、ヤマグルマなどの雲霧帯要素が高木として有力になり、雲霧林としての性格も強い。

①常緑樹について

常緑樹では、クスノキ科とツバキ科、ハイノキ科の優位が目立つ。しかし少数の主が明らかに優先している例は少なかった。

また屋久島には九州のカシ林に多いイチガシやアラカシ、シラカシ、コジイ、カゴノキ等の主要種が分布しない。そのため白谷でも見た目の多様さのわりには、種類数が少なく単純な構成になっているとすらいえ

るように思う。

イスノキは陰樹で、安定したエリアでは500m～800m付近の尾根筋などにアカガシなどととも極層林を作る種である。白谷では弥生杉周辺に若木巨木ともに多いすばらしいイスノキ林が見られるが、他にまとまった群落は少ない。むしろ伐採からの回復途上と見られる若いホソバタブの群落が白谷山荘を中心に多い。また低木で圧倒的に多いのがサクラツツジで、この種はほとんどの個体がギャップのなかの切株や倒木に着生していると思われるので、森の更新の指標になるかもしれない。直径30cmを越える巨木もあるがこれは島津藩政時代に更新したものだろう。

②落葉樹について

白谷は照葉樹林であるわりに落葉樹の紅葉が美しい。出現した74種のうち落葉樹は25種ある。高塚～淀川縦走路の調査(YNAC通信第8号)から本来ブナ帯に属するとされる標高1200m以上の樹種を抽出すると、42種中落葉樹が18種である。高地と比較すると照葉樹林の白谷で落葉樹の比率が少ないのは当然で、むしろ意外に落葉樹が多い。落葉樹は発芽に光が不可欠なため、常緑樹林の中では伐採や台風による攪乱など森のおかれているための指標として面白い存在である。

白谷に落葉樹が多いのは、林道はもちろん島津藩政時代から戦前に至るまでの様々なステージの伐採跡があること、照葉樹林系の落葉樹とブナ林系の落葉樹がともに生育することなどが原因と思われる。

またナナカマドなど本来地上性の種が着生植物として登場していることも一因である。屋久島の常緑の森では林冠が開いているためこういった植物は発芽のしようがないが、ヤクスギやツガの樹冠に近い着生植物床(コケのマット)の上でなら生育可能なのである。

屋久島の固有種が5種(ヤクスミアジサイ、ヤクスミキイチゴ、ヤクスミカラスザンショウ、ヤクスミオナガカエデ、アクシバモドキ)固有変種が1種(ヤクスミガクウツギ)、準固有種(アオツリバナ、これは九州南部、おそらく霧島にも分布するとされている)が1種それぞれ出現したが、すべて落葉樹であるのは面白い。

アクシバモドキとアオツリバナ(少なくとも屋久島では)は、完全に着生植物である。樹上という屋久島独特の立地で適応進化を遂げた植物なのだろうか。どちらも緑色の枝で光合成をしているのがおもしろい。

③ヤクスミオナガカエデ

葉がカエデらしくない固有種。カエデ特有のフットワークのよさで照葉樹林帯のギャップに入りこむ重要な種。主に林道脇や比較的新しい伐採地などに見られるが、白谷では面白いことにイスノキやハリギリをホストにして着生しているものが多い。(図。)生長が速いため、ホストよりも太い頭でつかちになっていたりする。ホストを絞め殺してしまい、傾いて他の木に寄りかかっているものも良く見かける。古いヤクスギ切株上にヤマザクラなどととも生育することもある。

カエデは一般に適応力のある植物といわれているが、このように着生までしてしまうのは屋久島ならではのことだろう。

④ヤクスギ

「ヤクスギ」ということばには、いろいろな意味が含まれるので、誤解を招きがちだが、ここでは生物地理学的な意味を重視し、文中では自生のスギをすべてヤクスギと標記する。

意外なことに、白谷にはヤクスギがあまり多くない。コースの中で、スギ群落といえるのは辻峠北東の谷一帯と、奉行杉の下部の小規模な崩壊地に成立したらしい群落くらいのものである。林元を床には巨大な切株や倒木が点々とし、島津藩政時代以前には現在とは異なり巨大なスギ林の様相を見せていたようだが、伐採後にスギが定着せず、照葉樹が圧倒したものだろう。白谷山荘周辺に一部スギの若年木の群落が見られるが、これは昭和10年ころの伐採の跡地に生えた実生と思われ、多少下

払い等の作業が行われた結果かもしれない。

標高1000mを越えるヤクスギランドの周辺などでは現在も崩壊後にスギが猛烈な勢いで芽生えてくるが、白谷ではスギの実生が非常に少ない。理由には伐採による種木の減少、あるいは気候変動による照葉樹林の上昇などが考えられる。

ヤクスギの生態の例としてしばしば倒木上更新があげられるが、白谷ではこれもさほど多くはなく、むしろ切株、倒木上にはヤマグルマの着生が多い。

関西などでは飛鳥～平安時代の大建築時代にスギやヒノキなど温帯性針葉樹の大森林が伐採された後、それらが復活せず、跡地には照葉樹林が成立してしまっただけで知られているが、それと似た現象が白谷でも見られるわけである。

谷沿いの個体などに、幹上部(地上数m～十数m)から根根を伸ばしているものが見られる。これは幹や枝に生育する厚い着生植物床(着生コケのマット)に発根して、それがそのまま生長を続けたものである。

これに関して、酸素を補給するために伸ばしたものだと言う奇妙な解説があるが、これには何か出典があるのだろうか?定かな話でないのなら、表現を変えるか、撤去すべきであろう。

⑤モミとツガ

白谷の緩やかな谷間は尾根筋や急斜面を好むツガの生育に適していないが、コース中の尾根筋に数カ所、ツガの巨木がパッチ上に周囲から突出して生育している部分がある。羽神岳の急峻な尾根にもツガは多いようだ。

またモミは、白谷山荘周辺の沢沿いの平坦地に比較的多く見られる。高さ25m、直径1～2mに達するモミの巨木が、せいぜい10m、直径10～20cm程しかないホソバタブなどの再生林からタワーのように抜きん出て点在する林相は、常識では考えにくいものだ。これはモミ・ツガが低質材とされ、屋久島では販路も用途もなかったため、島津時代から現代まで誰もあえて手をつけなかったため、と考えられている。

昔も今も屋久島の伐採はヤクスギ中心なのである。白谷でも近年モミの立ち枯れが目につくようになり、気

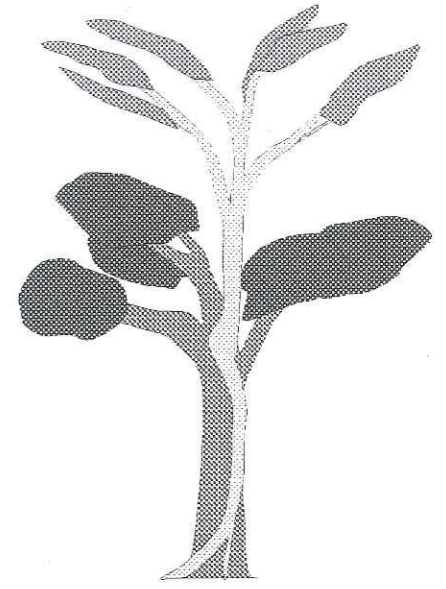


図. イスノキに着生するヤクスミオナガカエデ

にかかると、後継ぎの若年木は一部を除きほとんど見られない。

終わりに

屋久島の世界遺産登録地域は評判こそ高いが、ちょうど食べた魚の骨のようにいびつな形をしている上、他国の自然遺産地域と比較してけた違いに面積が狭い。保護区内こそいい森だが、一步保護区を出ると、バリカンで刈り取ったようなヤブばかりになる。森として広がりのある部分は島の南部や西部の急傾斜地を中心に限られた範囲にしかない。

そういうなかで、狭いながらも北東部に残された白谷雲水峡の照葉樹林の価値は高い。

また標高600～1000mは島内でももっとも伐採の進んだ標高ゾーンでもあり、温帯性針葉樹を交えたカシ林照葉樹林として国内唯一といつていい貴重なエリアである。

しかし白谷は、不思議なことだが、世界遺産はおろか、国立公園にも含まれていない。早急に何らかの法的な裏づけのある保護区に編入すべきではないだろうか。

また現在の解説板には誤りが多く、必要以上に大きくて景観にそぐわないものもある。また必要以上に自然を破壊した遊歩など改善すべき点も多い。

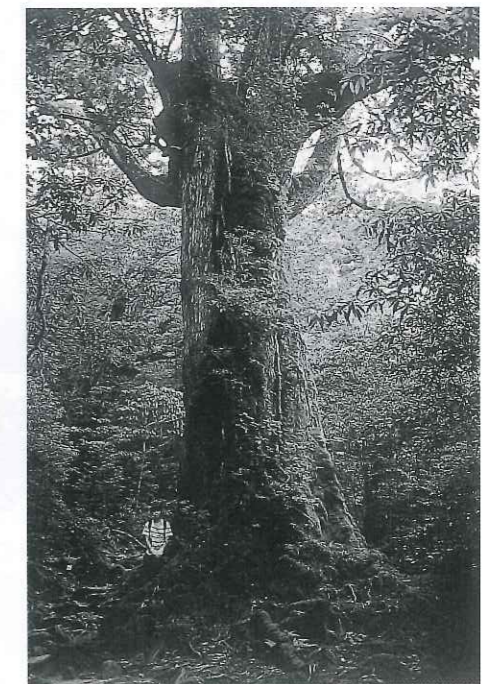
幸い今後国有林のあり方を考え直す際に、民間のセンスも取り入れることになっているようなので、こういった問題もきちんと検討し直すべきであろう。

表. 白谷雲水峡の樹木

No.	科名	種名	別名	学名	変種名	優先種 ⁽¹⁾	高さ	特徴	備考
1	マツ科	ツガ		<i>Tsuga sieboldii</i>		○	超高		
2	マツ科	モミ		<i>Abies firma</i>		○	超高		
3	スギ科	スギ		<i>Cryptomeria japonica</i>		○	超高	(着生) ⁽²⁾	
4	スギ科	ヒノキ		<i>Chamaecyparis obtusa</i>			高	(着生)	
5	センリョウ科	センリョウ		<i>Chloranthus glaber</i>			低		
6	ヤマモモ科	ヤマモモ		<i>Myrica rubra</i>			高		
7	カバノキ科	ヤシヤブシ		<i>Alnus firma</i>			中	落	
8	カバノキ科	アカシデ		<i>Carpinus laxiflora</i>		○林道	高	落	
9	ブナ科	アカガシ		<i>Quercus acuta</i>		○	高		
10	ブナ科	ウラボシ		<i>Quercus salicina</i>		○	高		
11	ブナ科	スタジイ		<i>Castanopsis sieboldii</i>			高		
12	ブナ科	マテバシイ		<i>Lithocarpus edulis</i>			高		
13	ヤドリギ	オオバヤドリギ		<i>Scurrula yadoriki</i>			低	半寄生	
14	ヤドリギ	マツグミ		<i>Taxillus kaempferi</i>			低	半寄生	
15	モクレン科	シキミ		<i>Illicium anisatum</i>		○	中		
16	クスノキ科	ヤブニツケイ		<i>Cinnamomum japonicum</i>			中		
17	クスノキ科	ホソバタブ	アオガシ	<i>Machilus japonica</i>		○	高		
18	クスノキ科	タブノキ		<i>Machilus thunbergii</i>			高		
19	クスノキ科	カナクキノキ		<i>Lindera erythocarpa</i>			高	落	
20	クスノキ科	イヌガシ		<i>Neolitsea aciculata</i>		○	高		
21	クスノキ科	シロダモ		<i>Neolitsea sericea</i>			高		
22	クスノキ科	ハリハリノキ		<i>Litsea acuminata</i>			高		
23	ヤマグルマ科	ヤマグルマ		<i>Trochodendron aralioides</i>		○	高	(着生)	
24	アケビ科	ムベ		<i>Stauntonia hexaphylla</i>			つる ⁽³⁾		
25	ツバキ科	リンゴツバキ		<i>Camellia japonica</i>	var. macrocarpa	○	中		
26	ツバキ科	サザンカ		<i>Camellia sasanqua</i>		○	中		
27	ツバキ科	ヒメシャラ		<i>Stewartia monadelphica</i>		○	高	落	
28	ツバキ科	モッコク		<i>Ternstroemia gymnanthera</i>			中		
29	ツバキ科	サカキ		<i>Cleyera japonica</i>		○	中	両	
30	ツバキ科	ヒサカキ		<i>Eurya japonica</i>			中		
31	マンサク科	イスノキ		<i>Distylium racemosum</i>		○	高		
32	ユキノシタ科	ツルアジサイ		<i>Hydrangea petiolaris</i>			つる	落	
33	ユキノシタ科	ハルウツギ		<i>Hydrangea paniculata</i>			低	落	
34	ユキノシタ科	ヤクシマカクウツギ		<i>Hydrangea luteo-venosa</i>	var. yakusimensis		低	落	固有変種
35	ユキノシタ科	ヤクシマアジサイ		<i>Hydrangea grosserrata</i>			低	落	固有種
36	バラ科	ヤマザクラ		<i>Prunus jamasakura</i>		○	高	落(着生)	
37	バラ科	ホウロクイチゴ		<i>Rubus sieboldii</i>			低		
38	バラ科	ヤクシマイチゴ		<i>Rubus yakumontanus</i>			低	落	固有種
39	バラ科	オオハライチゴ		<i>Rubus croceacanthus</i>			低	落	
40	バラ科	ナナカマド		<i>Sorbus commixta</i>			低	落、着生	
41	トウダイグサ科	アブラギリ		<i>Aleurites cordata</i>			高	落	外来種
42	トウダイグサ科	アカメシロ		<i>Mallotus japonicus</i>			中	落	
43	トウダイグサ科	ユズリハ		<i>Daphniphyllum macropodum</i>		○	高		
44	ミカン科	ヤクシマカラスザンショウ		<i>Zanthoxylum yakumontanum</i>			高	落	固有種
45	ミカン科	ミヤマシキミ		<i>Sikimmia japonica</i>			低	着生	
46	カエデ科	ヤクシマオナガカエデ		<i>Acer morifolium</i>		○林道	高	落(着生)	固有種
47	モチノキ科	ツクシイヌツゲ		<i>Ilex crenata</i>	var. fukasawana		中		
48	モチノキ科	ソヨゴ		<i>Ilex pedunculosa</i>			低	着生	
49	モチノキ科	ツゲモチ?		<i>Ilex goshiensis</i>			低		⁽⁴⁾
50	ニシキギ科	アオツリバナ		<i>Euonymus yakushimensis</i>			低	落、着生	準固有種
51	ホルトノキ科	ホルトノキ		<i>Elaeocarpus sylvestris</i>			高		
52	ホルトノキ科	コハンモチ		<i>Elaeocarpus japonicus</i>			高		

No.	科名	種名	別名	学名	変種名	優先種	高さ	特徴	固有種
53	ジンチョウゲ科	シマサクラカンピ		<i>Diplomorpha yakushimensis</i>			低	落	
54	ミズキ科	ヤマホウシ		<i>Benthamidia japonica</i>			中	落	
55	ウコギ科	ハリギリ	ミヤコダラ	<i>Dendropanax trifidus</i>			高	落	
56	ウコギ科	カクレミノ		<i>Kalopanax pictus</i>			高	(着生)	
57	リョウブ科	リョウブ		<i>Clethra barbinervis</i>			中	落、着生	
58	ツツジ科	ヒカゲツツジ		<i>Rhododendron keiskei</i>			低	着生	
59	ツツジ科	サツキ		<i>Rhododendron indicum</i>			低	溪流沿い	
60	ツツジ科	サクラツツジ		<i>Rhododendron tashiroi</i>		○	中	(着生)	
61	ツツジ科	アセビ		<i>Pieris japonica</i>			中	(着生)	
62	ツツジ科	アケハモトキ		<i>Vaccinium yakushimense</i>			低	落、着生	固有種
63	ヤブコウジ科	モクダチバナ		<i>Ardisia sieboldii</i>			中		
64	ヤブコウジ科	マンリョウ		<i>Ardisia crenata</i>			低		
65	ヤブコウジ科	タミンチバナ		<i>Myrsine seguinii</i>			中	(着生)	
66	カキノキ科	リュウキュウマカキ		<i>Diospyros japonica</i>			高	落	
67	エゴノキ科	エゴノキ		<i>Styrax japonica</i>		○林道	中	落	
68	ハイノキ科	ハイノキ		<i>Symplocos myrtacea</i>		○	中		
69	ハイノキ科	オニクロキ	ヒロハノミズハイ	<i>Symplocos tanakae</i>			中		
70	ハイノキ科	クロキ?		<i>Symplocos lucida</i>			中		
71	ハイノキ科	ミズハイ		<i>Symplocos glauca</i>			中		
72	ハイノキ科	クロハイ		<i>Symplocos prunifolia</i>		○	高		
73	アカネ科	アトオシ		<i>Damnacanthus indicus</i>			低		
74	クマツヅラ科	アマクサキ		<i>Clerodendrum trichotomum</i>	var. yakushimense		中	落	

- (1) 良く見かける、という程度の意味。植生学的なものではない
 (2) (着生): 着生することもある 落: 落葉樹、それ以外は常緑樹
 (3) つる植物は他に数種あるようだが、未調査
 (4) 準固有種: アオツリバナは九州南部(霧島)にも分布することになっている



左: 白谷の景観。照葉樹の林冠からヤクスギやモミが抜きでる。
 右: 白谷有数の巨木、七本杉。

行動で魚を見分けよう

松本毅

1、初めに

前編では種を見分ける方法について書いた。種が見分けられるようになると、今度はその種について詳しく観察してみよう。その種がどんな所にいて、どの辺をどのように泳いでいるか、どんなものを食べているか、そのようなことを観察していると、その種を探するときどんな所を探せばいいかがわかってくる。また、いつもと違う行動や体色などから求愛行動・縄張り争い・産卵行動などの前兆に気づいたりして思わぬチャンスをもたせることができるようになる。

そこで後編では、魚の行動を観察するポイントをおさえておこう。

2、棲む場所

魚は、隠れ場や餌などによって棲む場所が限定されていることが多い。棲む場所の分類には色々な分け方がある。大きく水域を分けた内水面(沼・池)・河川・汽水・沿岸・外洋などの分け方。また、生活環境を分けた岩場・サンゴ・砂地・

海藻・海草・洞窟(岩影)などの分け方。深海・浅海、水底・中層・水面下、また水深などで分ける分け方など。色々な分け方が出来るがとりあえず「沿岸の浅い水深のサンゴの多い岩場でサンゴの下を中心に生息している」というような表現でその環境がイメージできれば特に定義をする必要もないだろう。

3、泳ぎ方

魚が泳ぐとき、尾ひれを使って泳ぐと思っている人がほとんどではないだろうか？これは小学校のときのメダカの観察がいけない。すべての魚が尾ひれで泳ぐという固定観念を植え付けてしまった。実際に海の中で魚が泳ぐのを観察してみると案外尾ひれで泳いでいる魚が少ないのに驚く。泳ぎ方には、尾ひれを使って全身で泳ぐ(マグロ型)、胸びれで羽ばたくように泳ぐ(ペラ型)、背びれと尻びれを小刻みに震わすように泳ぐ(カワハギ型)、背びれと尻びれを羽ばたくように泳ぐ(フグ型)、胸びれを特殊

化させ歩くように泳ぐ(ホウボウ型)などがある。泳ぎ方は魚の生活様式を反映しているの、魚の観察には重要な要素となる。

4、餌の取り方

魚が何を餌とするのかは、その魚の生息環境、体形、泳ぎ方、口の形、歯などを決定づける。魚の歯を見れば、魚が何を食べているかをだいたい見当をつけることができるという。魚類、甲殻類、底生動物、動物性プランクトン、サンゴ虫、藻類など何を食べているかを調べると魚の生活が見えてくる。また、逆に生息環境や行動から何を食べているかを推理してみるのもまたフィッシュウォッチングの楽しみとなる。同じ魚食性でも群れを作って狩りをする種、単独で果敢に挑む種、じっと待って捕らえる種、仕掛けを作っておびきよせる種など様々で、それぞれの魚が餌を獲るための特徴をもっている。餌を獲るという行動は生きるためのもっとも基本的な行動だけに、魚を理解する上でとても重要であり、おもしろいものである。

5、ちょっとした変化を見つける

このように魚の生息環境や生活行動を観察しているといつもとは違う行動に出くわすことがある。いつも岩影で単独で縄張りを作っている種が、ある日なぜか2匹で仲良く泳いでいる姿を見つける。よく見ると1匹はメスでおなかで卵でパンパンになっていたりする。うまくすれば日没近くに産卵行動が見れるかもしれない。そのような前兆に気づくためには、普段の様子を知っていなければならない。そこで普段の様子をしっかりと観察しておこう。そして、あれっと思ったときはじっくり観察してみると何が違うのか、何

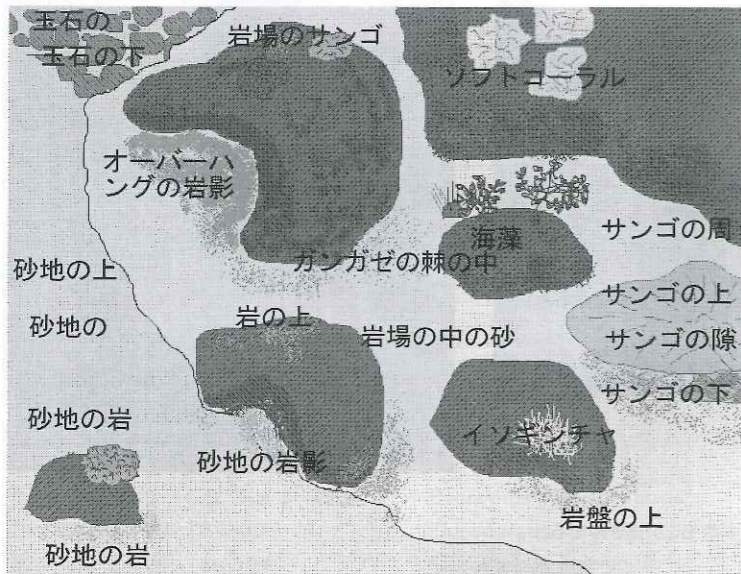


図1. 魚の生活する場所

が起こりそうかがわかってくる。

6、基本形10について見てみよう

①ハタ科: 日本産62属449種 屋久島産32種

いくら魚食性のハタの仲間でも外洋の水面下をダツのようにキビナゴを追いかけて回すようなことはない。沿岸の岩場やサンゴ礁、またはその周辺の砂地にいる。岩の上に乗っかってじっとしていたり、岩場や砂地の水底近くを全身を使ってゆっくり泳ぎ回っていたり、水底近くで胸びれと尾びれを使ってホーパリングをしながら餌の小鱼を狙っていたりする。食性は魚類・甲殻類などの肉食性である。大型で食物連鎖の上位に位置するので普段は悠然と泳いでいる。ダイバーに気づくと遠目にこちらを観察していることがある。

ただし、ハナダイの仲間は例外で小型で色鮮やかなものが多い。プランクトン食なので潮通しのいい岩場や崖で群れている。「生活岩」という特定の岩やサンゴの根に付いていて、餌を食べているときは潮上に向かって尾びれで忙しく泳いでいる。危険を感じるとさっと岩影に入ってしまう。雌雄で色・模様が違うので雄と雌の動きを観察してみるとおもしろい。

②ヒメジ科: 日本産3属22種

屋久島産12種 比較的浅い沿岸の岩場や砂地に水底近くを群れまたは単独で泳ぐものや岩や砂地の上でじっとしているものがある。普段泳いでいるときは、ひげはあごの下にたたま、全身で泳いでいる。食性は底生生物で肉食性。餌を獲るときは、あごに付いた皮膚が特殊化し味覚・嗅覚をもつ2本のひげで砂の中や水底に堆積したごみのなかを探りながら隠れた餌を探し出す。その時は、胸びれを主に使って調整している。おいしい餌にありついたときは体色を真っ赤にして喜んでいるのが分かる。ヒメジの仲間は、興奮したときや寝るとき、また死ぬと赤くなるものが多い。

③チョウチョウウオ科:

日本産7属51種 屋久島産32種 比較的浅い沿岸の岩場やサンゴ礁域に生息している。南方系の

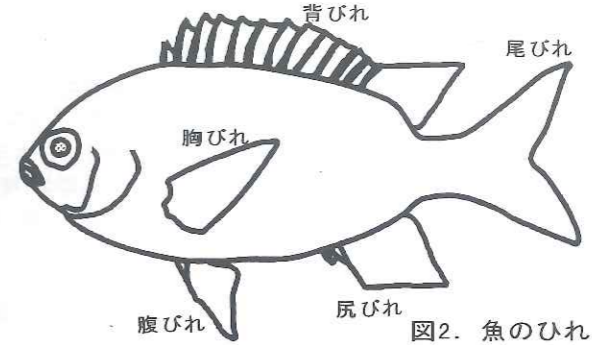


図2. 魚のひれ

種類が多く、温帯域では種類が極端に減ってしまう。南方系のサンゴ群落を中心に生息する種はサンゴ虫を主な餌とする肉食性の種が多いが、藻類・小型の底生動物などを食べる雑食性の種も多い。群れを作る種、常にペアでいる種、普段は単独でいる種がある。外観からは雄雌は分からない。ほとんどの種を使って泳いでいるか分からない。平べったい体全体が鰭のようになっていてのかもしれない。とんがった口先でつんと岩をついたり、サンゴ虫をついたり、クラゲをついたりしている。口が小さいのでいつもちょこちょこつまみ食いをするように餌を獲っている。

④キンチャクダイ科: 日本産7属 29種 屋久島産12種

比較的浅い沿岸の岩場やサンゴ礁域に生息しているが、中には水深20m以深に生息する種もある。チョウチョウウオと同じく、南方系の種類が多く、温帯域では種類が極端に減ってしまう。単独でいる種とあまり密度の高くないハーレムをつくる種がいる。キンチャクダイ科は雑食性で岩に付着するカイメンや小動物、藻類などをちょこちょこ岩を噛るように獲っている。小型の種や幼魚は岩の隠れ家近くを全身を使って神経質に泳ぎ回っているが、大型種の成魚になると悠然としてダイバーにも興味を示したりもする。驚いて岩影に逃げ込むとグー・グーと警戒音を発することがある。

⑤スズメダイ科: 日本産18属 91種 屋久島産48種

浅い沿岸の岩場やサンゴ礁域を生息域とする種が多いが中には水深20~40mを生息域にする種

もある。単独で岩場やサンゴの回りを住みかになっている種や群れで岩場やサンゴを住みかになっている種、イソギンチャクを住みかになっている種など多彩である。ちょろちょろ泳いでるのでどのヒレで泳いでいるかわかりにくい。だいたい尾びれと胸びれで泳いでいるようである。食性は、動物プランクトンしか食べない肉食性と藻類しか食べない藻食性と両方を食べる雑食性に分けられる。

日本産のスズメダイは90種あまりにおよび、多種多様である。スズメダイ科でまとめるより属レベルで検討したほうがよいかもれない。

⑥ペラ科: 日本産4亜科34属 126種 屋久島産76種

126種と大変種類が多いグループで、それだけ生息環境も多種多様である。全体的に浅い沿岸の岩場・サンゴ礁域・砂地・海藻・藻場などに生息している。素早く動くときは尾びれを使って全身で泳ぐが普段は胸びれだけで羽ばたくように泳いでいることが多い。食性は肉食性だが好みは魚類、甲殻類、底生動物、動物性プランクトン、サンゴ虫など様々である。

生態も変わり者が多く、砂の中で寝る種・クリーニングをする種・群れをつくる種・単独でいる種など話題に事欠かない。また、幼魚と成魚、雄と雌で紋様が異なり、幼魚のうちは雌で成長すると雄に性転換したりし、観察すればするほどおもしろいグループである。

⑦ブダイ科: 日本産4属31種

屋久島産18種 ペラ科と非常に近いグループであるが、大型種が多い。浅い沿岸の岩場・サンゴ礁域の水底近くに生息している。大きめの胸びれで

屋久島症候群④

GTI

From 馬怒娘

はや 1998 年も終わろうとしている。思い起こせば、今年の夏は、暑かった。なんで暑かったって？そやかて今年台風が来へんかったから。

いやいや、夏の終わりに強烈なんが来たで。

ほら大阪から来た 4 人娘。馬怒娘 (バドガールズ)。たった 1 日、安房川をカヌーで案内しただけなのに、未だに彼女らの歌う、「焼きそばの歌」が頭から消えへん。

じゅっじゅっじゅー♪、じゅっじゅっじゅー♪

あ、あかん、つい口ずさんでまう。

煙の中に、歯が 4 本♪、チエちゃんの笑う歯が 4 本♪

じゅっじゅっじゅー♪、じゅっじゅっじゅー♪

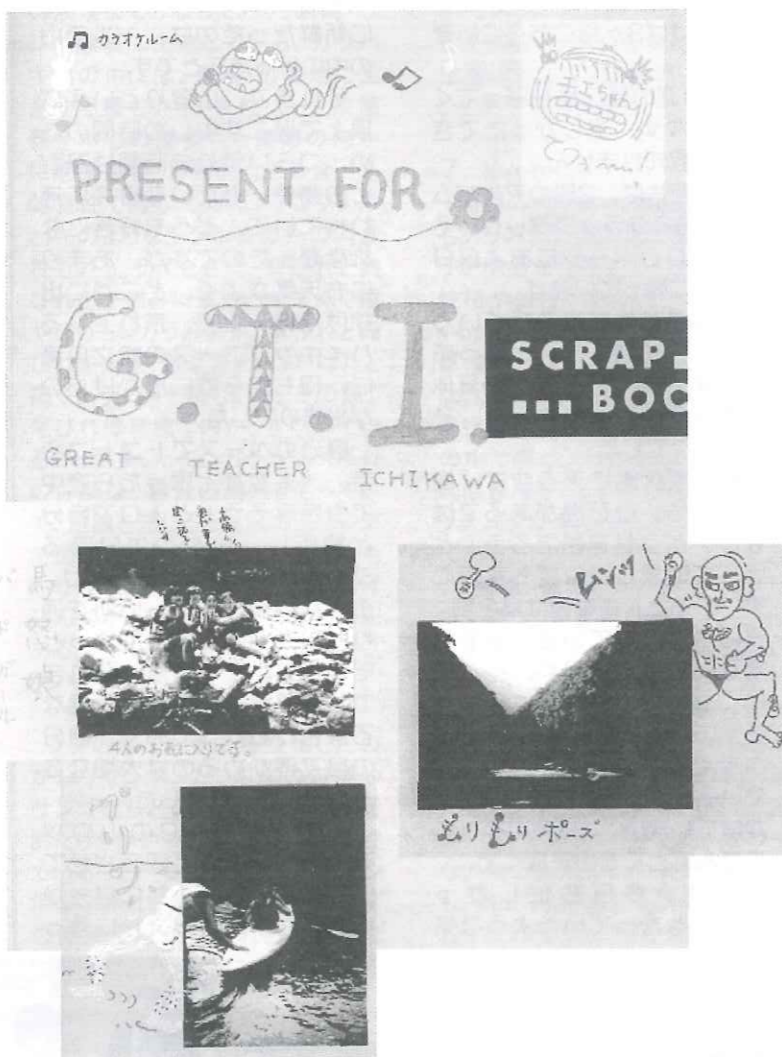
なんやこの歌は？じゃりんこチエちゃんけ！どこが焼きそばや！

ということで今回の症例は、あまりの毒気にこちらが感染してしまったという、逆屋久島症候群だ。

率いてきたノリちゃんは、去年に続き 2 回目の屋久島。去年もこんなやったよろか？というぐらい、今回は強烈なメンバーを揃えての再訪だった。

だいたいカメラを向けると「だっちゅうーの！」だし、カヌーの岩屋はカラオケルームにしてしまうし。安房川に響く、「あの素晴らしい愛をもう一度」のコーラスは、時の流れを止め屋久島を歌声喫茶に変えてしまった。一緒にハモリたかったなー。

そんな台風が、強力な吹き返しを送って来た。その名も GTI。(GTI って何？という方は、今年大ヒットしたテレビドラマ GTO を参照) 仕事が終わって 18 時から近くのファミリーレストランを占拠し、0 時前までかかって仕上げ



これが GTI だ！

よってたかって書いたと思われる、全編にちりばめられたエログロナンセンス系のイラストとコメントが大爆笑。

最後には、宿題までもらってしまった。来年までに「焼きそばの歌」を覚えるように！テスト有りだって…トホホ

そんな彼女らのうち、ノリちゃんとしじみちゃんが、12月にまたまた屋久島にやってきた。やっぱり彼女らも重症だ。来年の夏、はなこさん、ゆうこちゃんとまた来てちょんまげ。

(市川)

BOOK REVIEW 屋久島本の世界

1998は書籍に突りの多い年でした。屋久島フリークにはこたえられない本が一山。グラス片手に至福の時間を！

★聖なる地球のつどいかな ゲーリー・スナイダー 山尾三省 山と溪谷社 ¥1900.

山尾三省は対談のときには、聞き役に回る傾向がある。もちろん語るべきことはきちんと語っているのだが、それ以上に相手の話を面白がりながら引き出している。この本はまるで彼が「先輩」スナイダーをシラネバダに訪ね、インタビューをしているという趣だ。そうして交わされる対話にじつに深みがあり、面白い。二人とも詩人だし、スナイダーはとても語り慣れ

ている感じで、放たれる言葉はいちいちわかりやすいイメージと意味を持っている。実践と思索を繰り返して、その積み重ねが言葉として醗酵して出てきた、という印象で、体を動かしながら読むのに実にいい本だと思う。ハードノキの話や「リビングサイエンス」などエコツーリズムの根本に通じる考え方も出てきて興味深い。山尾三省は詩人として知られているが、

この対談や、詩や宗教哲学の解説という分野での優れた仕事からみると、巨大な対象を捉えて分かりやすく解き明かすことの出来る、優れた評論家(？というのか)でもある。縄文杉との関わりの中で彼の詩を1~2編のみ取り上げて論じた文章なども見かけますが、それは見当違いというものだろう。

★屋久島の環境民俗学 中島成久 明石書店 ¥2500.

秀吉の時代から現代までの屋久島と島外との関わりを、さまざまな分野にわたる引用、考察と見解でまとめた本。引用典としては重要な資料をほぼ網羅しており、述べられる見解も大部分は常識的な内容だ。「屋久杉の消えた谷」(津田邦弘1986朝日新聞社)が絶版となったので、この本の登場はあり

がたい。まあ固い本だが、この本を読んでなによりも強く感じるのは、「出郷者」である著者の、故郷屋久島へ対する熱い想いだ。「現実の屋久島に利害関係がないぶん、より長期的な観点」から語っているのだが、筆が進むにつれて今の屋久島をとりまく諸々への心配やいらだち、島に対す

るアンフェアな(と著者が考える)発言や文章への憤りがポロポロ出てきてしまうのである。読後に感じるそこはかかない疲れは、そういった見解の多さに困るのかもしれないが、ともあれ屋久島の現状に関心のある人なら一読の価値はあり、と思う。

★森林列島 水越武 岩波書店 ¥6000.

英題の“The Natural Heritage of Japan”のほうが、この本の視野の広さをよく表現しているかもしれない。自然地理学をバックボーンにして、日本列島の自然を森林を中心に深みと広がりのある重厚な写真で再構成した骨太な写真集である。姉妹編の「日本の原生林」(岩波書店)が、照葉樹林やブナ林など森の種類ごとに日本列島をながめわたす編集だったのに対して、

「森林列島」は屋久島、黒部、白神、大雪山など日本を象徴できるエリアを選んでまとめられたものだ。資源利用や感性という面から語られる「森」ものが多いなかで、この本は違う。穂高の雪稜がなぜ一章を占めるのか。私なりに解釈すれば、日本海側の積雪こそが、たとえばかつて山口から青森までの山間部を覆い尽くしたウラスギの原生林を支えていたからである。

日本列島の生態系の多様さを改めて見なおす思いである。日本には世界の気候帯のうち、砂漠とサバンナ以外のすべてがあるとされる「森」も、こうして素晴らしい写真で再現されるとまったくその通りだ。これは遺された自然の断片、つまり「自然遺産」から日本の原型を復元する試みなのである。今後屋久島が日本で果たしてゆく役割を、暗示した作品ともいえるだろう。

★花崗岩地形の世界 池田碩 古今書院 ¥3500

岩石地形で良く知られているのは、鍾乳洞やカルスト台地でおなじみの石灰岩だが、いや、花崗岩もいろいろあるのだ、という一種のおたく本、もとい、一般向けのまじめな解説書。奈良大学の池田先生(花崗岩フリークとしかいいようがない)が、花崗岩地形を求めて国内はもちろん世界を漫遊し、集めた成果がここにまとまった。いや~花崗岩が好きで好きで~と言う感覚は屋久島にいると涙が出るほどよくわかる。このいても立ってもいられない

という衝動のあり方こそ、まさにエコツーリズム実践の鑑といえよう。もちろん内容もきちんとしている。写真も豊富で読むだけでも花崗岩地形の鑑識眼が発達し、なるほど屋久島の地形はこんな具合に出来たのか、と感ずることが出来るのだ。池田先生の慧眼の賜物である。地質学的な裏付け、つまり地中からの視点についてはあまり触れられていないが、それは自分の宿題ということにしよう。キナバルも屋久島も取り上げられて

いる。水墨画で知られる中国の黄山も花崗岩で、植生も面白いそうなので行ってみたいと思っていたが、写真によると山上に巨大な宿舎がある。あたかも屋久島の投石平にいわさきホテルを建てて、宮之浦岳まで階段を作ったような景観で、これにはひるんでしまった。

しかし我ながらこういう本をよく見つけるものだと思う。

他に、「一万年の旅路 ネイティブ・アメリカンの口承史」ポーラ・アンダーウッド 星川淳訳 翔泳社 ¥2500
「縄文の響 屋久島」三井純夫写真集 南日本新聞発センター ¥2800
が出版されています。

「一万年の旅路」は、屋久島に直接関係はありませんが、アメリカインディアンの一氏族であるおそらくイロコイ族の驚くべき伝承の活字化です。YNACのホームページで少し詳しく紹介しています。屋久島在住の作家、星川淳氏自身の翻訳で、星野道夫によるカリブーの写真を使った表紙がかっこいい。

屋久島

有象無象

ウゾウムゾウ

本نداかどうだか

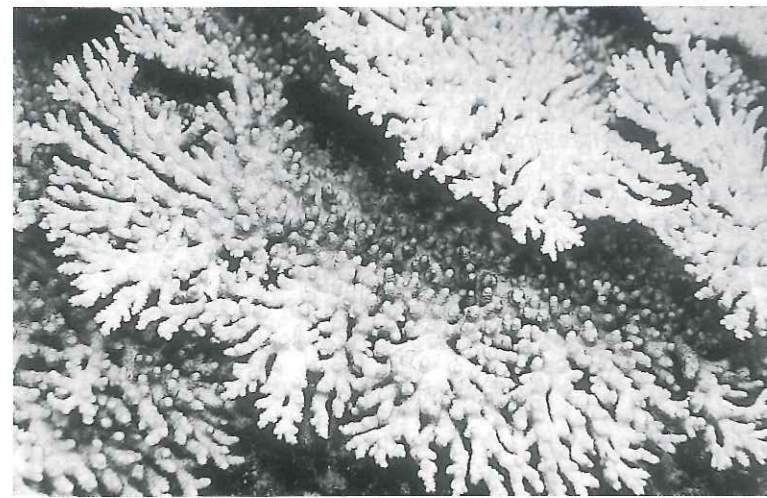
第9弾!

サンゴの白化

今年の夏、沖縄から南九州にかけてサンゴに「白化現象」が起こり、大騒ぎとなった。屋久島も白化現象で沿岸の海の色が変わってしまった。しかし、水温が下がってからぼちぼちと回復してきた。死滅したサンゴはどうも見た感じでは2〜3割程度であろうかと思われる。当初心配したより被害は少なかった。白化現象については色々書かれているのでそちらを参考にさせていただきたい。「生命の島」47号にも書いた。ここではその白化現象で新たな発見をしたことを少し書いてみたい。

まづ、何より驚いたのは、クマノミがよく付いているシライトイソギンチャクやサンゴイソギンチャクなどの大型のイソギンチャクがサンゴと同じように白化現象を起こしたのだ。先端だけが鮮やかなピンクで後は真っ白の触手をゆらゆらなびかせている。真っ白なイソギンチャクの中で色鮮やかなクマノミが見えかくれする姿は今まで以上に美しく感じられた。しかし、イソギンチャクが白化したということはイソギンチャクも褐虫藻（サンゴと共生をする単細胞藻類）と共生をしていたということだ。そんな話は聞いたことも読んだこともなかった。しかし、逆にこれまでイソギンチャクに

対する漠然とした疑問の答えになっているような気がした。つまり、イソギンチャクは触手を使って魚などを捕らえて食べる肉食の動物であると思っていた。一度、お客さんがたまたま手にしていたウミウシをシライトイソギンチャクの上に落としてしまい、助けようとしたときには既に遅く、見る見る触手に巻き込まれて口の中へ取り込まれてしまった。やっぱりイソギンチャクは肉食なのだと思再認識したことがあった。が、自然の状態ですべて実際にイソギンチャクが魚などを捕らえて食べている姿というものを観察したことは一度もなかった。おそらく、イソギンチャクが魚などを口にする機会は大変少ないのではないだろうか。そんな栄養状態では小さなイソギンチャクならまだしも、シライトイソギンチャクのように50〜60cmにもなる大型のイソギンチャクではもつはずが無い。それが、今回褐虫藻を共生させている事がわかって、全てが腑に落ちた。岩影の奥に取りついたシライトイソギンチャクは思いっきり体を伸ばして日の当たる岩の上にゆらゆらと触手の葉を広げてサンゴのように光合成をしていたのだ。シライトイソギンチャクをいじめると体全体を岩影にひっこめてしまう。イソギンチャクにも外敵がいてそれから身を守っている。そうすると、あの美しい触手は獲物を捕ら



白化したサンゴ（ミドリイシの仲間）

えるためというよりは身を守るための盾となり、また、光合成を行う表面積を多くするためのものとなったのではないだろうか。

もし、白化現象でシライトイソギンチャクやサンゴイソギンチャクが白化しなければこのような想像には至らなかったであろう。これからクマノミの観察と同時にこのような視点でイソギンチャクを見ていく事がまた楽しみとなった。（松本）

半山のビール瓶

屋久島西部地域の照葉樹林は、島内でも唯一海岸線まで世界遺産地域に登録されている貴重な地域の一つであるが、必ずしも手付かずの原生林というわけではない。今でこそ無人地帯であるが、かつては炭焼きや樟脳とりのために開拓が行われた地域である。半山の照葉樹林を歩くと、そうしたかつての開拓の住居跡や五右衛門風呂の釜、食器や水瓶等の生活の跡を垣間見ることができる。

その中で目を引くのが、ビール瓶である。大日本ビール、帝国ビール、サクラビールといった現在では飲む事のできない3種類のビール瓶が、住宅跡などにゴロゴロと転がっているのである。

日本でビール造りが始まったのは、明治の初めのことである。

明治9年、北海道開拓史麦酒製造所（後に札幌麦酒に払い下げ）が開業され、翌年にはじめての本格的な国産ビールとして札幌ビールが発売された。その後明治21年にジャパン・ブルワリーが麒麟ビール、明治23年に日本麦酒醸造がエビスビール、明治24年に大阪麦酒がアサヒビールをと明治の半ばに次々と国産ビールが発売され、ビール産業の勃興期を迎える。

この時期は、シェア争いがし烈を極め、ついに明治39年、札幌、日本、大阪の3社の大合同により、大日本麦酒が誕生した。大日本麦酒は、戦後昭和24年に財閥解体され、日本麦酒（後のサッポロビール）と朝日麦酒に2分割されるまで、国内シェア7割を超える大会社としてビール業界をリードした。従って、大日本麦酒の瓶は、明治39年から昭和24年までの間に飲まれたものである。

ところで半山の大日本麦酒の瓶には3種類あった。一つはDAINIPPONBEERと英語で書かれたもの、もう一つは、酒麦本日大と右から左へ漢字で書かれたものである。太平洋戦争中、ビールは統制下におかれ、敵性語としてビールが「麦酒」に統一されている。従って、酒麦本日大は戦中に飲まれていたビール瓶で、DAINIPPONBEERはそれ以前のものかもしれない。

一方、帝国麦酒は、大正元年に設立され、翌年サクラビールが発売されている。従って、サクラビールは帝国麦酒の商品名ということになる。しかし、帝国麦酒は昭和4年に桜麦酒と社名変更を行っており、帝国麦酒の名が使われていたのは、この間に限られる。また桜麦酒は、昭和18年に大日本麦酒と合併しており、サクラビールは、大正2年から昭和18年までに飲まれていたビールということに

なる。

以上を総合すると、半山のビール瓶は、明治の末から戦後しばらくの間に飲まれた商品のものであり、帝国麦酒の瓶の存在を考えると、半山でのビール飲みの歴史は少なくとも大正から昭和のはじめまで、確実に溯ることができるということになる。

それにしても戦後も開拓が行われているが、麒麟ビールやサッポロビールといった、戦後のものと思われるビール瓶は一向に見かけない。おそらくもっぱら焼酎を飲んでいたのであろう。戦前、半山でビールを飲む、おしゃべりな開拓者たちの暮らしとは、一体どのようなものであったのであろうか？（市川）

ヤマグルマのぬれぎぬ

ヤマグルマは絞め殺し植物だと、いまだに思っている人はいないだろうか？大切なヤクスギを枯らす害木だと。いいえ、それはとんでもないぬれぎぬなのだ。

ヤマグルマは、木部に針葉樹のような仮導管しかもたない、とても古い種族だ。北は関東上越、南は台湾までの霧の湧く岩壁などにひっそりと生育している。

この木は、恐るべき十字架を背負っている。発芽から二年間は土壌中の耐病性がまったくないらしいのである。つまり幼いヤマグルマにとって、豊穣なる土は、ヒラニアのようよする川みたないなものなのだ。土壌の魔の手が届かないところで発芽したものだけが生き長らえることが出来る。しかもややこしいことに発芽には光と十分な水を必要とする。このような条件を満たすところなどこの世の中にいくらかもない。せいぜい霧のかかる山稜の岩壁が火口壁にへばりついた蘚苔類にしがみつくりのりものだ。

ところが、これらの条件をゆうゆうクリアするパラダイスが屋久島に出現した。もともと多かったようだが、この350年間、伐採によってヤクスギの切株が大量生産され、これが周辺の巨岩とともにまたとないヤマグルマの苗床となった。今日のヤマグルマの王国は、半分ほどは人間が作り出したものなのだ。その例を今日の白谷や瀬切に見ることが出来る。

さて、人はヤマグルマを絞め殺し植物と呼ぶ。非道にもヤクスギの根元に絡み付いて絞め殺してしまうからだ。しかし、私はこれまで明らかにヤクスギを絞め殺しているヤマグルマを見たことがない。枯れ木についている場合も、すでに枯れていた木に着生したと思われるものが多い。栄養の奪い合いにヤクスギが破れることはあるかもしれないが、少なくとも絞め殺そうという意図は感じられない。

つまりヤマグルマは絞め殺しなんてことは毛頭考えていない。ただ単に危険な土壌をのがれて、よるべを求めてすがりついているだけなのだ。

ヤクスギランドにひとつ、完璧に絞めがまった例がある。しかしどの資料を

見ても他に例がないのかその木の写真しか載っておらず、それにそのヤクスギは元気でちょっと死にそうにない。ヤマグルマ

とヤクスギは案外平気で共存しているようなのだ。（小原）



半山のビール瓶。左から帝国麦酒、サクラビール、大日本ビールの浮き文字が見える。



伐採用ワイヤーの支点がわりにされたヤマグルマ。食い込むワイヤーもそのまま放置されている。傍らのヤクスギにはあて木がされている。

撮影：川鍋一恵

Calendar

1998年

- 7/20~ ハワイ・フォレスト&トレール社のエコツアーガイド
マサ(新谷雅徳)がYNACで研修
- 8/4~7 市川 立山で開かれた「全国ナチュラルリストのつど
い」でパネリスト。途中、立山杉を見てくる
- 9/1 下田和子、アルバイト開始
- 9/2 市川、屋久町環境審議会委員に。河東田晴香退社。マサ研
修終了。ハワイ島エコツアーの可能性?
- 9/14~ 市川「屋久島の自然地域における保護と利用のあり方
検討会」の検討委員に。
- 10/12 小原、口永良部島金岳小学校の体験学習でカヌー講習
- 10/13~14 松本・小原、東洋工学専門学校の屋久島実習の
講師をつとめる
- 10/15~18 初の有隣堂フィッシュウォッチング講座を予
定していたが、台風接近のため涙をのんで中止
- 10/29 小原、大阪府三島高校修学旅行の、エコツアーを担当。
- 11/6~9 有隣堂秋のツアーで花山へ。圧倒的な屋久杉の森を
堪能
- 11/25~26 屋久島シーカヤック・スキッパーズ・クラブ種
子島遠征。少々波があったものの熊野海岸、竹崎海岸など
素晴らしいロケーションを楽しむ。YNAC 4人全員参加
- 12/1 下田和子アルバイト、楽しすぎて1ヶ月延長して終了
- 12/5 小原 横浜の有隣堂で台湾、ボルネオツアーの説明会。
その後伊豆の天城山の森へ。またバリ島ツアーの可能性を
見いだす
- 12/10 屋久島ガイド協会の肝煎りにより、初めて島内ガイド
関係者の集まりがもたれた。つまり忘年会です。永田にて。
- 12/14 松本、屋久島観光連絡協議会主催の「山岳ガイド等関
係者打ち合わせ会」に出席

Library

執筆記事 松本、獅子奮迅の活躍はつづく!

★魚まちー沖縄水産ネットワークマガジン 1998年6、7月号

「特集エコツーリズムの時代へ」

3月に宜野湾で行われたエコツーリズム推進協議会第一回大会でのシ
ンポジウムのうち、ホールアース自然学校の広瀬さんなど、国内の実動
エコツアー関係者が集まったセッション2が収録されている。松本がプ
レゼンターとして参加。過去の印刷物の中で、おそらくエコツーリズム
の現状がもっともわかりやすく述べられている。雑誌自体にも勢いがあ
り、おもしろい! 沖縄!

★観光文化 1998年11月号「特集日本型エコツーリズムを採
る」エコツアーは地域主導型の観光 松本毅

実践例として大はホールアース広瀬さん、小はYNAC松本というのが
どうも定番になってしまったのであろうか。これといい「旅」といい「JB系
はさすがに読ませる雑誌を作っている。『るるぶ』もでした。

★季刊 ECO ツーリズム 1998年10月「屋久島ガイドセミナー
実施中」松本毅

エコツーリズム推進協議会の機関誌。これまたホールアースと並んでいる
が、今度はあちらはなんと沖縄校新設の話でうむむ! しかし編集部
「エコツー」という略称は、ものすごくかっこ悪いぞ。

★生命の島 46号「屋久島海物語」他人のそら似 松本毅
猛毒のシマキンチャクフグに瓜二つのノコギリハギ。この2種を通じ、
進化についての壮大な考察を展開。ひねりにひねった末に結末は数
千年後に持ち越された。お楽しみに!

★生命の島 47号「屋久島海物語」暑い夏 松本毅 この
夏南西諸島はサンゴの白化現象が大問題になった。騒ぎに首をかきげつ
つ押さえたトーンで解説。屋久島での結果はというと、どうやら松本の予
言どおりに。→有象無象へ。

★南日本新聞

月に1回ですが、小原がちょっとだけ書評を書いています。初回は思わ
ずうなった「一万年の旅路」星川淳と「聖なる地球のつどいかな」ゲー
リースナイダー+山尾三省の2冊。2月まで。

取材記事

小学3年生 1999年1月号「ドラえもんの大自然漂流記」第1
回 屋久島 屋久島に来たドラえもんとのび太をつれて、栗生小学校の
元気な子どもたちが、西部の山に遊びに行った。一緒に行った小原さん
の自然や子どもたちについての話に、ドラえもん達もうなずいていけぞ。

Schedule

1月

「屋久島ネイチャーガイド連絡
協議会(仮称)」発足準備に入りま
した。年度内に目処がつく可能性が高
いようです。YNACも中心メンバー
の一員として話し合いに加わってい
ます。

2月中

YNACは一部新装オー
プン予定です。デザイン
は屋久杉自然館で評価を
高めている優水工房。少
しウッディな外観になり
ます。お楽しみに。

2/4

松本が、屋久島環境文化村研
修センター研修プログラムで
講師を務めます。鹿児島県内
の教員を対象に、エコツーリス
ムについてレクチャーをする
予定です。

2/22~28

有隣堂ボルネオツアーが開催され
ます。ダナンバレー3日間、シバダ
ン・マフル3日間の講師はYNAC
の松本・市川。美しいキナバルの
自然観察登山のオプションも用意さ
れています。お問い合わせは有隣堂生
涯学習部(担当:土橋)045-82
5-5539またはYNACまで。

YNAC研修制度始まりました。

研修生募集中!

内容: 屋久島をフィールドに、エコツアーに関する実習・セミナーなど
期間: 1999年3月~11月(約9カ月間)

研修費: 無料。補助金制度あり。

詳しくはYNACまで

編集後記

■いよいよ世紀末! しっかり20世紀のケリをつけて、新たなる2
1世紀を迎えたものだ。YNACも今年はいくつかを総括して21
世紀のための新しい体制を作り上げていきたいと思う。(松本)

■今年はいくつか、YNAC通信は9号。あいも変わらず、く、く、
く、苦しい編集作業。とはいえ、大言を覆し、輝ける10号へ
向けて、YNACは今日も行く。(市川)

■紙はシャクナゲの黒味岳から見た宮之浦岳。今年の花はまあまあ
のようで楽しみだ。さて、今年には山キャンプを増やしたい。なるべ
くそら辺でテントでも張って寝るように心がけるべし。(小原)

YNAC通信(ワイナックつうしん)第8号

発行日: 1999年1月1日

発行: 南屋久島野外活動総合センター

住所: 〒891-1205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com

http://www.ynac.com